



大淀中だより

学校教育目標「自主・自律の態度と共生の心を育成する」

京都市立大淀中学校

学校だより

令和8年(2026)7月22日

校長 塩見 登

夏よ いつまでも(夏季大会)

梅雨が明け、7月中旬になり暑さが本格的になってきました。3年生の最後の大会が各会場で暑くそして熱く繰り広げられ始めています。多くの部活が18日からの3連休と夏休み期間に大会を迎えます。結果をお伝えするのは、夏休み明けの学校だよりになる予定です。少しでも長く、この夏が続くことを応援しています。結果の一部を報告します。

(サッカー部)1回戦 vs 下京中学校 1-1 (PK 戦で惜敗) 泣き崩れる選手たち。土壇場でおいつき、最後まで粘りを見せた姿は、観戦に来ていた人たちの心を熱くしました。



表現力・質問力(トークイン大淀②)



1年生“学習について”2年生“チャレンジ体験を通して”3年生“修学旅行から”というタイトルで2名ずつ発表してくれました。今年度、重点的に取り組んでいる表現力・質問力を発揮するいい機会でもあります。オンラインではありましたが、発表を受けて発表者へ意見を返す場面が多く見られました。2学期からは、本格的に探究活動も始まり生徒の皆さんの表現力や質問力が発揮させる場面が増えてきます。ここでは、3年生の生徒の一部をご紹介します。

“私は、修学旅行を終えて何か変わったことがあったわけではないと感じています。3年間で1度しかないイベントであるにもかかわらず、特別な感情がこみ上げてくるということもほとんどありませんでした。まだ、中学校生活3年間の最後だという現実を受け止められていないのだと感じました。そんな修学旅行で、私が感じた事は時間の流れは速くて楽しくてもいつの間にか終わっていたなということでした。修学旅行が、一生忘れられない思い出となるかは分かりません。しかし、一生役に立つ経験であったことに違いないと思います。知らない土地で行動する難しさ、下調べの重要さ、人との関わり方、人の素と呼ばれる部分はその人が仲の良い人にしか見せなかったり人を気遣う余裕もないほど疲れている時にしか見られません。友達のそういった面と向き合う難しさも学ぶことが出来たと思います。この3日間で、下調べ不足や間違いは、受験や自分の好きなことに挑戦したりするときに必要な力が欠けていると捉えられます。修学旅行では、多くのことに挑戦しました。受験までの数か月でやらなくてはいけない事が多くあります。その中でもたくさん挑戦して経験することが大切だと感じました。時間は、有限だということは誰もが理解しているけどその限界がどこにあるかをわかっている人は少ないと思います。だからこそ、小さい目標でも、大きい目標でもそこから逆算して余裕をもって取り組むことが大切だと修学旅行を通してわかりました。これからは、先を意識して行動し時間と周りを大切にしたいと思います。”

熱中症対策(帽子・日傘・水筒)

西ヨーロッパで熱波。そんなニュースが流れた6月下旬から7月上旬。京都では、世界のどこかで起こっている熱中症といった感じだったのでないでしょうか？しかし、梅雨が明けた7月中旬から朝の登校時間からうだるような暑さです。夏休みや2学期も今以上に暑くなります。各自、日差しを避けるために帽子・日傘などで身を守るようにしてください。また、水分補給も大切な熱中症対策になります。登校時や外出時は水筒を忘れず持参するようにしてください。学校では、熱中症対策として、夏休みの部活動は公式戦や校外での練習試合を除いて基本的に午前中のみでの予定にしております。また、活動中はクーラーを稼働した部屋を常に準備する予定です。

ドリームゼミ(面接)



“なぜ、このゼミを希望したのですか？”

“このゼミでどんなことをしてみたいですか？”

3年生から1年生そして2年生に向けて質問をしています。2学期から本格的に始まるドリームゼミのゼミ生を募集する面接が、図書室・理科室に分かれて行われています。3年生にとっても一緒に活動していくメンバーを選ぶので必死です。そして、1年生2年生にとっても少しでも自分たちの興味があるゼミに入るために真剣に面接に挑んでいます。

希望通りのゼミに入れる人もいれば、そうでない人もいます。どのゼミになっても新しい自分を発見できる大きなチャンスです。自分たちで“問い”をたて“仮説”そして“検証”へ、中学生にとっては難しいことかもしれません。しかし、これからの時代、決まった答えを探し出すだけでなく、その先を導き出す力が必要になります。中学校を卒業して高校や大学そして社会では答えがない問いを自ら探究する力が必要とされてきます。今年度は、このドリームゼミの報告会を12月23日に保護者の方や地域の方々に参観していただき交流する予定です。みなさま、是非ご参加ください。



～三者懇談会・学校評価アンケートのお礼～

保護者の皆様。三者懇談会に来校していただきありがとうございました。また、同時期にすぐるにて配信させていただいた学校評価に関する保護者アンケートに多数の方々にご協力をいただきました。保護者・生徒・教職員のアンケートを参考に2学期以降の教育活動を行っていきたいと思います。ご協力ありがとうございました。

～淀から世界へ(校長の独り言)～

1980年 59。2001年 44。2023年 63。これは、ジンバブエに関する数字です。なんだと思いますか？

1980年 75。2001年 81。2023年 84。こちらは、日本に関する数字です。両国の数字の推移にいくつかの違いがあります。最も大きな違いが何かお気づきでしょうか？

そうです。この数字は、両国の平均寿命の推移です。日本は世界でも有数の長寿大国であります。しかし、今なお、この2国間を比べると20年の隔たりがあるのです。なぜこのような隔たりがあるかは想像が出来るかもしれません。しかし、私がジンバブエにいた2001年、ジンバブエの平均寿命は44歳と言われていました。なぜ？その現実を目の当たりにする場面が日常で起こります。ある日、普段通りソフトボール普及の巡回活動をしている学校で事件は起こります。運動中は、子どもたちは裸足です。危険なので寄付で集めた靴をもっていても一瞬だけはいて、裸足になります。これが彼らの普通なのです。

“郷に入れば郷に従え”協力隊の基本精神に従い、私も裸足で駆け回る。1日も持たずに断念。私と彼らとの足裏には想像を超える隔たりがありました。裸足で駆け回る彼らの一人が、大きな打球を打ちベースを回ります。ホームにめがけてスライディング。こけたのかスライディングかわからない状態でホームにたどり着くも普段生活の中で鍛えられた頑丈に出来上がった足の爪から大量に出血。とっさに駆け寄り、日本から持参していた応急処置用のキッドで手当をしようとしていたその時、近くで見ていた先生が、“Mr. Shiomi, What are you doing? (何してるんだ!)”すごい剣幕で怒っています。怪我をさせてしまったことに怒っていると思いきや私が素手で治療をしようとしていることに怒っていたのです。素手で血に触れることの危機管理を怠っていたのです。ジンバブエを含むサハラ砂漠以南の地域は、深刻なHIV／エイズの問題がありました。大人だけでなく、小学生を含め子どももHIVウイルスに感染している可能性が十分にあるのです。当時100万人を超えるエイズ孤児がいるという現状を知った私は、エイズ孤児のグループホームにソフトボールを教えに行きました。そこにソフトボールを普及したいという思いなどありません。生きる喜び、希望、大袈裟かもしれませんがそれらを伝えたい思いしかありませんでした。母子感染からHIVウイルスに感染している子どももたくさんいたでしょう。笑顔いっぱい走り回っている姿。見知らぬ日本人の周りを囲む無邪気な姿。訪れるたびに、思わず涙が溢れ出てくる。いつか、いつか里帰りがしたい。再会のその時まで、友よ、元気にいようね。(喜怒哀楽) つづく！